

j-milk リポート

vol-20
2016. SPRING

特集1 ■ 乳の学術連合の窓
子どもの「判断力」を育てるために
～学校教育で食育が目指すものとは～
藤本 勇二氏 武庫川女子大学 講師

特集2 ■ 日本人の健康と新たな栄養問題
～生活習慣病とフレイル予防における牛乳乳製品の役割とは～
中村 丁次氏 神奈川県立保健福祉大学 学長

特集3 ■ 「平成 28 年度事業計画及び収支予算」概要



C CONTENTS

03 **特集1** 乳の学術連合の窓

子どもの「判断力」を育てるために

～学校教育で食育が目指すものとは～

藤本 勇二 氏 武庫川女子大学 講師

05 **特集2**

日本人の健康と新たな栄養問題

～生活習慣病とフレイル予防における牛乳乳製品の役割とは～

中村 丁次 氏 神奈川県立保健福祉大学 学長

06

幼児向けに牛乳を活用した食育教材を開発

～幼稚園での実践で、子どもたちの反応に先生方も価値を実感～

07

平成 28 年度「乳の学術連合」学術研究
研究課題及び研究者を決定

08 **特集3**

「平成 28 年度事業計画及び収支予算」概要

12

平成 28 年度の生乳及び牛乳乳製品の
需給見通しと今後の課題について

15

平成 28 年度牛乳の日・牛乳月間の取り組み

～課題解決に向けた推進方法を決定～

16

牛乳乳製品に関する食生活動向調査 2015 から

～牛乳類の飲用頻度は、やや増加傾向へ～

18

Jミルクの活動日誌

平成27年12月1日から平成28年2月29日に実施した主な委員会及びイベント

19

今後のスケジュール・平成 28 年度ブロック会議を開催
スタッフ紹介・編集後記



乳の学術連合の窓

牛乳食育研究会

特集 1

子どもの「判断力」を育てるために

～学校教育で食育が目指すものとは～

藤本 勇二 氏 武庫川女子大学 講師

文部科学省では、学校教育における食育を推進するため、食育と学力の関連性を検証する「スーパー食育スクール」事業を平成26年度から実施し、あわせて“食育の教科書”を作成した。そこで、こうした事業を推進するきっかけとなった文科省の「今後の学校における食育のあり方に関する有識者会議」委員を務め、国のさまざまな食育施策に関わっている、武庫川女子大学の藤本勇二氏（乳の学術連合・牛乳食育研究会会員）に、今後の学校教育における食育の方向性やそのなかで求められる酪農乳業の食育支援のあり方について話を聞いた。

健康・栄養に限定せず食育を実践することが大切

—先生が食というテーマに興味を持たれたきっかけは。

藤本：小学校教員をしていた時に、理科の授業の教材として扱ったことがきっかけです。食を題材とした授業は、子どもたちが食を通して暮らしを考え、地域との関わりも深めることができる点に魅力を感じました。当時の学校教育では教科横断的な教育活動として「総合的な学習の時間」がスタートしたこともあり、社会の中にある物事のつながりや自分との関わりを、子どもたちの実感が伴う学習活動が実現できるよう、食を通して「暮らしの学力」をつけたいと考えるようになりました。

総合的な学習の時間は、子どもたちが主体的で探究的に学習をしていく場です。その際に「食」というテーマは、子どもたちが自分事として考える大きな原動力になります。食生活で身近な「牛乳」はその中でも特に日常的に摂っている食品であり、栄養や健康に加えて、地域や産業の歴史・風土、地理や環境、海外とのつながりなど、豊かな学びの広がりがあります。また、学習活動で「調理する」「食べる」など、子どもたちが楽しみながら関わることもできます。

—文科省の有識者会議のメンバーとして、「食育の教科書」作成を含めた今後の食育のあり方はどのような方向性で推進されているのでしょうか。

藤本：食育は、算数や国語のような一般教科ではないので、本来の教科書とは意味が違いますが、文科省が「食育の教科書」という呼び名で作成した教材には、いくつかの「ねらい」があります。ひとつは、食育を通してどの学年でどんな力を子どもにつけるのかを、小学校6年間や中学校も含めた義務教育段階を俯瞰で捉え、一般教科の指導と関連付けも含めて、学校教職員に分かりやすく体系化していこうとするものです。

平成26年度から始まった「スーパー食育スクール」事業では、指定された全国数十校の取り組み結果により、食育が学力や地域への愛着を育むことにつながっていることを根拠として示すことができるようになりました。これと連動した「教科書」を作成することで、学校教育における食育の必要性を再確認し、さらなる活動のそ野を広げたいという思いがあります。

個人的な意見ですが、これまでの学校で実践されていた一般的な食育活動は、栄養や健康に限定されすぎていると感じていました。特に教科を中心に子どもたちへの教育を組み立てる学校教育にとっては、テーマが限られる

と、食育に取り組む場面も少なくなってしまう。大切なことは、「食育はこうあるべき」ということより、子どもに多くの人に関わって取り組むなかで、食育が進むべき方向性や意義を見出していくことです。

子どもの視点を変え実感ともなう仕掛けを

—食育の今後の方向性を考えるうえで、軸になる教育的価値とは何でしょうか。

藤本：私は「判断する力」を育てることだと思います。知識があふれる現代社会では、知識を吟味し、つなげて考え、判断する力が求められます。その際、個人だけでなく社会や集団との結びつきのなかで判断する力も必要です。だからこそ学校教育では、協働的・探究的な活動が重視されるようになってきました。「判断する力」は、食育における食の選択力に限らず、広い意味でこれから生きる子どもたちに必要な力なのです。

具体的には、例えば日本の農業を教えるときも、昔ながらの農業と現代農業の両方を教えて「振り子の両端」を示し、自分たちが将来どのような社会を目指すのかを子ども自身に考えさせたうえで判断させたい。しかし、特にものがあふれる現代社会のなかにいると、子どもは個の消費者としての視点だけで判断しがちです。

大切なのは、子どもに視点を変えさせて考えさせることです。そのためには、子どもに実感がともなうような展開を意識することも必要です。

私は以前、「至高の朝食」という授業をしたことがあります。栄養教諭の指導を踏まえて朝ごはんにふさわしい献立を考え、自分たちで調理をしてコンテスト形式で発表しました。授業後にある子どもから、「お母さんは偉い」という感想が出ました。「忙しい朝に家族みんなのご飯をつくって、それからお母さんは化粧をして出かけるから偉い」のだと。この子どもは朝食の作り手になって視点を変えたことで、母親の動きが見えたのです。生産

者の立場で考えることは、こうした気づきを促す意味でも重要だと思います。

教え込まず子ども自身の言葉で紡がせる

—酪農乳業の関係者の立場から情報を発信し、酪農体験や出張授業などを通じて学校の食育活動を支援しています。こうした取り組みを充実させるポイントは。

藤本：伝え方を工夫することではないでしょうか。生産者などの関係者の方々の言葉は貴重です。しかし、時として熱い思いをそのまま伝えても、子どもが受け止めていない場合も多いです。例えば、伝える生産者などの人たちが「命」「働く」「感謝」といった価値語が前面に出やすいことにも注意すべきだと思います。

「命」という言葉は、それ自体が価値を含むもので、「命は大切」などと言われたら誰も否定できません。しかし、子どもにとって実感がともなわないまま言葉がひとり歩きしているだけで、そこに共感はなく、実際の「命を大切」にする行動にもつながりません。肝心なことは、教育の場で「命は大切だ」と教え込むのではなく、牧場での命の営みに関わる内実を伝えて、「これが命なんだ」と子どもたちが命の輪郭が描けるように、問いや投げかけをして子ども自身の言葉で紡がせていくことが大切です。

当然、教育は根気のいる活動です。子どもを信じて結果を急がず、諦めずに繰り返すしかありません。大人への情報発信やコミュニケーションも同じですが、一度伝えたくらいでは人は気づいてくれないし、変わってくれないものです。

しかし、伝えなければ何も変わりませんから、酪農乳業の関係者の方々が地道な情報発信や教育支援を続けていただきたいと思います。そうした皆さんと学校現場の実践者をつなぎ、勇気づけることが、私個人と「牛乳食育研究会」の活動が果たす役割だと考えています。



藤本 勇二 氏
武庫川女子大学 文学部教育学科 講師
徳島大学教育学部卒、鳴門教育大学大学院修士課程修了。徳島県の小学校教員を経て現職。



牛乳食育研究会
乳の学術連合

今後の食育のあり方だけでなく、コミュニケーションの面でも多くの示唆をいただきました。本日はありがとうございました。

日本人の健康と新たな栄養問題

～生活習慣病とフレイル予防における牛乳乳製品の役割とは～

特集2

Jミルクが主催する第41回メディアミルクセミナーが1月21日、都内で開催された。今回、神奈川県立保健福祉大学学長の中村丁次氏が「日本人の栄養と牛乳乳製品」をテーマに講演を行った。日本人が抱える新たな栄養問題と、生活習慣病やフレイル(虚弱)の予防における牛乳乳製品の役割について、学び多いセミナーとなった。



中村 丁次 氏

神奈川県立保健福祉大学 学長

徳島大学医学部栄養学科卒業。医学博士(東京大学医学部)。(公社)日本栄養士会会長。肥満・糖尿病の予防や治療のための食事療法、臨床栄養管理の研究、機能的食材の普及、啓発指導にかかわる。日本人の食と健康に関する啓蒙活動に取り組んでいる。

過剰栄養と低栄養が混在する現代の日本

伝統的な日本食は、栄養面では必ずしも健康的なものではない。かつての日本の庶民食は貧しいもので、栄養不足により多くの欠乏症、特に「脚気」に悩まされた。戦後の学校給食と栄養教育の普及により、日本人の栄養状態は大きく改善した。そこに牛乳乳製品が重要な役割を果たしてきたことは明らかである。

現代の日本では、過食と運動不足が原因による肥満や生活習慣病が問題視される一方で、若年女子・高齢者・傷病者の低栄養も混在するという、新たな栄養問題が発生している。「Double Burden Malnutrition (DBM)」、栄養障害の二重負荷と呼ばれる現象だ。

こうしたなか、国が掲げる健康寿命の延伸という目標を達成するためには、食事と栄養の改善を中心とする生活習慣全般の見直しが重要になってくる。

病気の発症に対する遺伝と生活習慣の関与を調べた研究論文(「The New England Journal of Medicine」、2000年)によると、遺伝の関与は3割、生活習慣は7割だとしている。この結果は、生活習慣の改善で病気の発症を低下させられる可能性を示している。複数の危険因子の個人レベルでの評価と低減、管理が生活習慣病の予防対策の軸になるだろう。

健康寿命延伸にも貢献できる牛乳乳製品

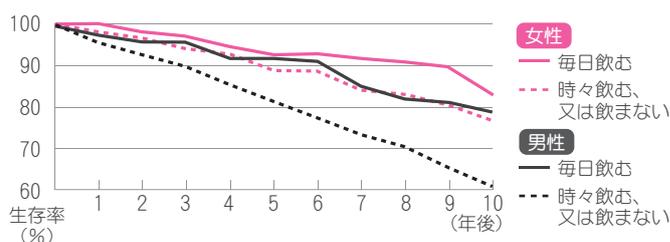
食事と栄養に関しても、最新の研究成果を踏まえた改善が必要だ。例えば牛乳は、近年の大規模な横断的研究の結果、摂取量が多い人は少ない人に比べてメタボの発症率が低いことが明らかになっている。また、カルシウムや牛乳乳製品の摂取が多いと、心血管疾患や脳卒中による死亡率が低いという研究成果も発表されている。

日本では2000年以降から高齢者の低栄養が深刻化し、痩せが原因の死亡率が高くなっている。痩せは要介護の前段階であるフレイル(虚弱)につながる。

かつて高齢者のたんぱく質摂取は、腎臓に負担を与えるため控えた方が良くとされてきたが、近年では健康な人であれば問題がないことがわかってきた。むしろ低栄養や痩せを防ぐために、高齢者ほど栄養、特にたんぱく質を十分に摂ることが推奨されている。

牛乳乳製品は良質なたんぱく質やカルシウム、ビタミンなどを豊富に含み、血圧上昇の抑制や糖尿病予防にも効果的である。しかも手軽に摂れるため、栄養の過剰と欠乏の問題を解決するうえで最適な食品であると言える。人間が幸せな人生をつくるために、栄養や食事のあり方を考えていくことが今後大切であろう。

高齢者(70歳)の牛乳飲用習慣と10年間の死亡率



出典:「ここがおかしい日本人の栄養常識-データでわかる 本気で正しい栄養の科学-」柴田博著 技術評論社(平成19年)

幼児向けに牛乳を活用した食育教材を開発

～幼稚園での実践で、子どもたちの反応に先生方も価値を実感～

Jミルクでは、2月24日に武蔵野短期大学附属幼稚園（埼玉県狭山市）の年長クラスを対象に、牛乳食育教材として開発した「絵本教材」の読み聞かせを行い、教育プログラムとともに実施した。この幼稚園では、完全給食を行っており、牛乳が身近にある園児たちの反応は、先生方の想像を超え、食育以外でも教育的効果があるのでは、という声も聞かれた。

子どもたちの具体的な発言に成果を実感

平成27年度は、宮崎県内の2園で予備調査を実施するとともに、園関係者からの意見も踏まえて絵本教材を作成した。

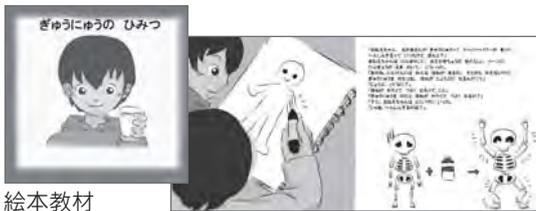
今回は、作成した教材をもとに、幼稚園での実践による効果を検証することで、牛乳を活用した食育活動の教育的価値や効果を確認し、その結果とともに今後の幼稚園・保育所における食育活動への普及につなげていくものである。

今回の教材を活用した実践成果について、酒井幸子園長は、「子どもたちの思いがけない、問いや疑問が出てきました。小さいときに疑問がたくさんあることはとても大事なことです。“なぜ”の回答を得るために、友達との会話が始まり、自分でも考える姿が多く見られました」と振り返った。また、同園では給食時に年長クラス限定ではあるが牛乳提供を始めた。「牛乳係が牛乳の本数を

自分たちで数え、どのように協力し合って教室まで運ぶかにも変化が出ました」と酒井園長は、副次的な効果として、牛乳提供が子どもの行動面の成長にも影響していることに言及した。

また、読み聞かせを行った担任教諭は、「普段は発言の少ない子から、『牛がない国はどうしているの』『飲まないと大きくなるよね』などたくさん発言ができました。また、牛だけではなく『牛や豚、鳥にも心の中でありがとうを言おう』と話した子までいました」と、子どもたちから具体的な言葉になって出てきたことに成果を感じていた。

給食で牛乳を飲む際には、パックに描かれている乳牛を見つけ「牛さんがいる!」と発言した子どもから、クラスの子どもたちがパックをじっくり眺めている場面もあった。クラスの担任教諭は「今までと変わらない牛乳パック。子どもの発言に驚かされました。実践の成果です」と話した。



絵本教材

絵本の使い方



先生の読み聞かせに夢中



牛乳を飲みながら笑顔



牛乳係がクラスの人数分を数える



振り返りで手を挙げる子ども達

平成28年度「乳の学術連合」学術研究 研究課題及び研究者を決定

「乳の学術連合」では、「牛乳乳製品の価値向上につながる医学・栄養学・食品科学・体育学等の分野の課題」、「乳の社会文化価値」、「食に関する教育の新たな知見」をテーマに、平成28年度の学術研究を広く公募した。審査委員会での審査を経て、「牛乳乳製品健康科学」11件、「乳の社会文化」8件、「食と教育」8件の研究課題及び研究者を決定した。

分野	No	氏名	研究機関名	役職	研究課題名
牛乳乳製品健康科学	1	天野 達郎	神戸大学大学院人間発達環境学研究科	研究員	運動後の血液量変化が発汗機能に及ぼす影響：牛乳を用いた熱中症予防のエビデンス
	2	藤田 聡	立命館大学スポーツ健康科学部	教授	低脂肪乳およびビタミンDサプリメントの併用摂取におけるアスリートの疲労骨折予防効果の検討
	3	柳田 紀之	国立病院機構相模原病院	小児科医	重症牛乳アレルギーに対する経口免疫療法ランダム化比較試験：Baked milk vs Raw milk
	4	前島 大輔	信州大学医学部	特任講師	腸間膜リンパ液を用いた牛乳の腸管免疫機能評価
	5	川田 智之	日本医科大学大学院医学研究科	大学院教授	地域在住高齢者の過去における牛乳摂取頻度とメンタルヘルス
	6	高垣 堅太郎	ライプニツ脳科学研究所	グループリーダー	プロバイオティクスの認知機能とストレスへの影響に関する研究
	7	寺内 公一	東京医科歯科大学	准教授	更年期女性の牛乳摂取とメンタルヘルス
	8	成田 美紀	東京都健康長寿医療センター研究所	研究員	高齢者の牛乳・乳製品摂取及び食品摂取の多様性とフレイル・サルコペニアの予防に関する研究
	9	坂根 郁夫	千葉大学大学院理学研究科 基礎理学専攻化学コース	教授	牛乳に特徴的且つ多量に含まれる脂肪酸による2型糖尿病リスク低減
	10	緒方 美佳	国立病院機構熊本医療センター 小児科	医師	牛乳アレルギーを有する学童に対する骨密度測定およびカルシウム補充療法について
	11	立木 隆広	近畿大学医学部公衆衛生学教室	助教	日常的な牛乳摂取と身体活動は、筋量の増加と筋機能の向上に役立つか —大規模無作為標本コホート研究—
乳の社会文化	1	齋藤 忠夫	東北大学大学院農学研究科	教授	機能性食品素材のチーズホエイを利用した「ホエイごはん」の集団給食への導入試行とその評価に関する研究
	2	上田 隆穂	学習院大学経済学部	教授	乳製品に関する消費者の低価格感度価格領域の推定 —グーテンベルグ仮説のモデル化の試みと利益を生み出す価格ポイントの発見—
	3	辻 貴志	国立民族博物館	外来研究員	フィリピン・ピサヤ地域における家畜の搾乳の有無に関する比較研究 —マクタン島とボホール島の事例—
	4	杉山 寿美	県立広島大学人間文化学部 健康科学科	教授	治療食における牛乳利用の栄養学的評価と対象者の嗜好・摂取意欲の変化
	5	大江 靖雄	千葉大学大学院園芸学研究科	教授	わが国酪農経営の多角化と経営効率性に関する実証分析
	6	清水池 義治	北海道大学大学院農学研究院 基礎研究部門農業経済学分野	准教授	TPP「大筋合意」内容にもとづく関税障壁の変化が日本の酪農乳業に及ぼす影響に関する研究
	7	尾崎 智子	同志社大学人文科学研究科	社外・嘱託研究員	牛乳販売店としての婦選獲得同盟
	8	堀北 哲也	日本大学生物資源科学部獣医学科	教授	千葉県四街道市鹿放ヶ丘地区の開拓者に関する調査研究
食と教育	1	大森 桂	山形大学地域教育文化学部	准教授	米国における栄養教育の評価方法および実施体制に関する調査研究
	2	池本 真二	聖徳大学人間栄養学部人間栄養学科	教授	女子中学生における学校給食での牛乳の有無の違いによる習慣的な栄養素摂取状況および食事パターンの検討
	3	扇原 淳	早稲田大学人間科学学術院	教授	乳文化を利用した多世代多文化交流健康生成プログラムの開発
	4	上野 茂昭	埼玉大学教育学部家政教育講座	准教授	牛乳および酸味料で調製した乳凝集物を用いた教育プログラムの開発
	5	水野 智美	筑波大学医学医療系	准教授	偏食傾向の強い自閉症児に対する牛乳・乳製品摂取の段階的食指導
	6	原田 哲夫	高知大学教育研究部人文社会科学系 教育学部門	教授	「朝牛乳摂取の健康増進効果」の教育的普及についての応用研究 ～各年齢層に応じた教材リーフレット作成とその効果の検証～
	7	佐藤 ゆき	東北大学大学院医学系研究科	助教	震災後の子どもたちの牛乳・乳製品摂取から探る効果的な食育のあり方に関する研究
	8	篠原 久枝	宮崎大学教育文化学部	准教授	学校給食と運動した家庭科を中心とした「乳」を意識した系統的、総合的な教育プログラム試案開発の基礎的研究 —北欧の家庭科における乳・乳製品の位置づけと学校給食との関連の視点から—

「平成28年度事業計画及び収支予算」概要

特集3

Jミルクは、酪農乳業関係者やミルクインフルエンサーに向けて、「牛乳乳製品の価値向上」及び「酪農乳業の共通課題解決」に役立つ情報の提供を責務としている。第2期3か年計画の2年目である28年度については、27年度事業の進捗状況や成果等を踏まえ、更なる事業成果をめざし、事業計画を策定した。以下に概要を抜粋して掲載する。

<http://www.j-milk.jp/about/index.html>

生産流通関連事業

1) 生産流通安定対策事業

需給安定対策事業

国際市場の変化等も踏まえた短期的・中長期的な予測作業に取り組むとともに、牛乳乳製品の確かな需要基盤を確保するため、3年程度を期間とする需給運営に資するような情報を提供。また、市場や流通の実態把握に注力するなど、質の高い需給情報を提供。

ポジティブリスト対応事業

ポジティブリスト制度等への適切な対応に努めるとともに定期的検査を早期に実施。なお、「酪農乳業の一体的な取り組み」をさらに強化していくための評価、改善の仕組みを構築。

生乳検査精度向上事業

認証制度の役割を確認しつつ、適切な認証取得を推進。生乳検査担当者への情報提供及び研修の場を提供。

課題解決情報提供事業

将来に向けて持続可能な酪農乳業の基盤確立を図る観点から、組織的な検討を進め、政府の「総合的なTPP関連対策大綱」において、酪農生産基盤強化のための乳用牛資源確保対策など、必要な施策が盛り込まれるよう献策活動を実施。また、酪農乳業の国際比較分析により、世界的な動向、わが国の課題を整理し提供。このための業務体制整備を推進。

活動運営管理事業

各委員会での酪農乳業課題の検討・取り組みに向けた提案等により、国内外の情勢の急速な変化に対応。また、酪農乳業関係者のニーズに対応したデータの整理、提供。

2) 災害等危機管理特別対策事業

災害等関連情報提供事業

「酪農乳業危機管理対策連絡会」を適宜適切に開催・運営するとともに、継続して、行政が実施する生乳・飼料中の放射性物質検査の結果について、WEBサイトで整理し掲載。

災害等支援環境整備事業

自給飼料に関する放射性物質検査に対する支援は、地域実態を踏まえ、事業費に上限を設定しつつ、29年度まで延長。

3) 学校給食牛乳定着化事業の具体的な内容

学乳制度の堅持及びその意義・役割が教育現場で正しく理解されるような施策の推進について、献策活動を行う。

風味問題については、マニュアルを改訂・整備し、その普及を図る。また、官能検査の拡充に対し支援、業界全体の将来的な方向性についても議論を進める。



乳和食指導者育成研修会

マーケティング関連事業

1) 知見集積・情報開発事業

乳の学術連合共同事業

『牛乳の日』記念学術フォーラム」は、他食品にない価値や国際化進展を踏まえた国産価値など、ミルクの価値を確立する視点とそれを訴求するためのストーリーの作り方をテーマに開催。

新たに、わが国における牛乳乳製品の総合的価値の理解につなげるための食育プログラムの開発に着手。また、乳に関する次世代研究者の育成を図るため、大学の研究室等を対象に研究活動を支援しその成果発表の場を提供。活動充実のための国際的学術交流を推進。

牛乳乳製品健康科学事業

健康寿命の延伸に貢献する「乳の価値」解明を目的に、学術研究を推進。

乳糖不耐に関する研究を継続するとともに、新たに、東京五輪開催によるスポーツ意識の高まりに対処し、スポーツアスリートと牛乳乳製品摂取の関係性についてのエビデンスを構築。

乳の社会文化事業

持続可能な食料生産や食生活・食文化の発展に貢献する「乳の価値」解明を目的に、学術研究を推進。

新たに、「不足払い制度」など戦後酪農乳業政策に関する総括的研究に着手するとともに、日本における乳文化定着を図るための、社会文化的な文脈づくりにつながる価値研究を推進。

牛乳食育事業

学校給食や食育における牛乳乳製品の有効活用を目的に、学術研究を推進。

牛乳乳製品の利用を促進するため、食の適切な判断や選択する能力及び態度を形成するための実践的な教育プログラム開発について、他研究グループと連携して推進。

2) コミュニケーション事業

医療関係者向け情報提供事業

医療関係者に牛乳乳製品の価値理解を促進し、疾病予防のために牛乳が適切に活用されることを目的に、関連する学会等との連携を強化。

栄養士向け情報提供事業

栄養士の栄養指導において牛乳活用の実践を促進

することを目的に、日本栄養士会との連携により、牛乳乳製品を活用した栄養指導実践セミナーを開催。

教職員向け情報提供事業

学校教職員が牛乳を活用した食育活動を実践することを通じ、児童生徒の将来にわたる牛乳乳製品の価値理解につなげることを目的に、全国学校栄養士協議会と連携し、栄養教諭等向けの牛乳食育研修会を開催。

サポートメンバー情報提供事業

酪農乳業関係者に対し、優れた情報コンテンツの提供や業界向けセミナー等を通して、Jミルク事業への理解や協力体制の関係構築を強化。

「アンチミルク対応」「乳和食の普及」「食育の推進」のため、ミルクインフルエンサーとの力強い関係構築を推進。また、医療関係者との新たなチャンネルとして、医師で組織される「全国骨を守る会」との連携した活動を開始。

新たに、乳の価値を学び広げる独自の活動を行っている酪農乳業関係者等のグループをサポートメンバーと位置づけ、その活動を支援するための講師・アドバイザーを派遣する事業を開始。

3) マーケティング管理事業

戦略設定・調査等情報収集事業

牛乳乳製品の総合的な価値の伝達や新たな戦略視点を導き出すため、調査結果をもとにした牛乳乳製品の価値開発を行うことが必要であることから、学術連合の研究者等と連携し、適切な調査設計と多面的な分析を実施。

活動運営管理事業

専門部会や委員会等の活動については、その役割である事業計画及び目標達成評価などを明確化し、機能的に運営。



酪農乳業みらいセミナー

4) 需要創出特別事業

牛乳の日・牛乳月間事業

数値目標の「認知率」が15%程度で停滞している状況を踏まえ、29年度からの新たな戦略設計を開始する。特に、国際化進展などの中で持続可能性の高い酪農乳業を構築する観点から、「国産価値の訴求」「価格競争から価値競争への転換」に向けた取り組みを強化。

28年度は、従来の内容で継続するが、29年度からの新たな取り組みが酪農乳業の協調的・一体的なものになるように、さらに踏み込んだ取り組みの強化を検討。

牛乳ヒーロー&ヒロインコンクールは、食育月間とも連動し、牛乳を活用した小学校の食育活動を広げ、学校関係者との関係を強化する機会と位置づけ継続。

乳和食等食材啓発事業

乳和食の利用の促進を目的に、調理指導する人材育成のための調理研修会を開催。乳和食の「減塩」機能や「おいしさ」の充足などの理解を通じ価値訴求を図り浸透。

酪農乳業関係者による推進体制の強化を目的に、乳和食を普及啓発する人材育成のための指導者育成研修会を開催するほか、講師派遣事業を継続して実施。

乳和食の家庭でのさらなる利用促進を図るため、新たなレシピをミルクカレンダー(2017年版)やWEBサイト等へ掲載。大量調理における乳和食の利用を、外食・中食や高齢者・福祉施設において促進。

新たに、乳和食の考え方やエビデンス、レシピを、和食ブームにある欧米でも訴求し話題化させることを通じて、さらなる国内での乳和食の普及を促進。

アンチミルク対策事業

アンチミルクに関する情報に迅速に対応するため、エビデンスの検証・情報発信を継続するとともに、これまで発信したエビデンスの再検証や最新の研究データ等への整理、ネットユーザーへの対応や迅速な見解作成・発信に向けた事務局体制を強化。

5) 広報事業の具体的な内容

メディア広報対策事業

メディア・ジャーナリストを対象にした「メディアミルクセミナー」を開催するとともに、セミナー内容を簡略に取りまとめたメディア向けレポートを発行し、メディアの関心を継続的に喚起。

酪農乳業の課題や牛乳乳製品の価値向上に関する情報について、メディアの適切かつ正確な報道を促進するため、わかりやすい報道用基礎資料を充実させ発行。

需給情報、酪農乳業政策に関する見解、価値情報などを、「プレスリリース」により積極的にメディアに発信し、適切な報道を促進。

WEBサイト運営事業

Jミルクの情報全般についてWEBサイト上で効率的に提供するとともに、ミルクインフルエンサー及びサポートメンバーとの専門情報の共有等は学術連合サイトなどを活用。公式Facebook等のSNSを活用し価値情報を高頻度で提供するとともに、ミルクインフルエンサー及びサポートメンバーに関連情報が確実に閲覧・シェアされるためのコンテンツを工夫。

組織広報活動事業

Jミルクの事業推進を酪農乳業関係者に周知するため、Jミルクレポートを発行。また、ブロック会議等の開催を通じ、Jミルク活動への理解醸成を推進。酪農乳業みらいセミナーを開催し、酪農乳業の中長期的課題やあるべき姿を検討し、認識を共有化。

Jミルクの活動を酪農現場にも周知徹底するため、業界誌等を活用した生産者向け広報活動を強化。

新たに、牛乳乳製品の栄養健康機能の新しいエビデンスやアンチミルク情報に関する海外の動向を把握するため、IDF(JIDF)・GDPなどと日常的に連携して活動を行う体制を整備。また、海外の酪農乳業に関する経済・経営政策情報をIFCNから収集し国内に広報する活動を開始するほか、必要に応じて日本の酪農乳業や牛乳乳製品の価値情報を海外に広報。

総務関連事業

強固な業務推進体制を構築するため、予算進捗管理等の事業管理を徹底。事業成果等の蓄積のため、プロパー職員と出向職員との役割を明確化しつつ、職員の個性と能力を引き出し、チーム力を強化するためのマネジメントを推進。一層の組織基盤の強化と業務効率化を図るため、組織運営のあり方について必要な検討。

平成28年度収支予算

平成28年4月1日から平成29年3月31日まで

1. 収入

会費収入の基本となる会員・賛助会員の会費については、27年度と同額の単価とする。賦課金収入の基本となる拠出金については、27年度と同額の単価（飲用牛乳等向け生乳1kg当たり5銭、加工向け生乳1kg当たり2銭）とする。

なお、災害等危機管理特別事業、需要創出特別事業に充当するための必要な額を、酪農乳業緊急対応基金から捻出するものとする。

2. 支出

28年度の事業支出については、上記の28年度に見込まれる収入に見合った支出計画を基本に、引き続き、効率的、効果的な事業の実施を図るものとする。

(単位：千円)				
科 目	予 算 額	前年度予算額	増 減	
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
(1) 会費収入	2,080	2,150	△70	
(2) 賦課金収入	458,075	461,085	△3,010	
(3) 補助金収入	44,000	45,000	△1,000	
(4) 受託事業収入	200	1,916	△1,716	
(5) 雑収入	1,900	5,500	△3,600	
事業活動収入計	506,255	515,651	△9,396	
2. 事業活動支出				
(1) 生産流通安定対策事業支出計	77,055	83,083	△6,028	
(2) 災害等危機管理対策事業支出計	26,430	26,561	△131	
(3) 知見集積・情報開発事業支出計	93,908	102,178	△8,270	
(4) コミュニケーション事業支出計	69,269	59,209	10,060	
(5) マーケティング管理事業支出計	30,121	26,363	3,758	
(6) 需要創出特別事業支出計	87,647	88,825	△1,178	
(7) 広報事業支出計	83,450	80,034	3,416	
(8) 管理費支出計	107,101	103,014	4,087	
事業活動支出計	574,981	569,267	5,714	
事業収支差額	△68,726	△53,616	△15,110	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入計				
	48,430	43,591	4,839	
2. 投資活動支出計				
	5,064	4,098	966	
投資活動収支差額	43,366	39,493	3,873	
III 予備費支出				
	20,000	20,000	0	
当期収支差額	△45,360	△34,123	△11,237	
前期繰越収支差額	74,854	61,205	13,649	
次期繰越収支差額	29,494	27,082	2,412	

平成28年度の生乳及び牛乳乳製品の 需給見通しと今後の課題について

公表：平成28年1月27日

生乳生産量の見通し

28年度の生乳生産量は、北海道では生産の主力となる2～4歳の乳牛頭数が前年度を超えて推移し前年度を上回る(3,931千トン・前年比100.9%)一方で、都府県では前年度を下回り(3,443千トン・同97.8%)、その結果、全国の年度計では前年度をやや下回る(7,374千トン・同99.4%)見通しである。

用途別処理量の見通し

28年度の用途別処理量は、「牛乳等向処理量」は前年度をやや下回り(3,901千トン・前年比99.3%)、また「乳製品向処理量」も前年度をやや下回る(3,418千トン・同99.5%)見通しである。

28年度	生乳生産量見通し						用途別処理量見通し (千トン,%)					
	全国		北海道		都府県		生乳供給量		牛乳等向		乳製品向	
	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	
第1四半期	1,917	101.0	1,002	102.1	915	99.8	1,903	101.0	1,006	98.8	897	103.6
第2四半期	1,825	99.7	993	101.7	832	97.4	1,811	99.7	1,003	100.4	808	98.9
第3四半期	1,796	99.2	964	100.6	833	97.6	1,783	99.2	972	99.4	811	98.9
第4四半期	1,836	97.7	972	99.2	864	96.2	1,822	97.7	920	98.6	902	96.9
年度計	7,374	99.4	3,931	100.9	3,443	97.8	7,319	99.4	3,901	99.3	3,418	99.5
閏年修正後	—	99.7	—	101.2	—	98.1	—	99.7	—	99.6	—	99.8

牛乳等生産量見通し

(千kl,%)

28年度	牛乳類										はっ酵乳	
	牛乳		加工乳		成分調整牛乳		乳飲料					
	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	
第1四半期	1,201	98.0	759	98.4	24	97.5	90	100.9	328	96.4	287	104.3
第2四半期	1,240	100.3	754	99.9	25	100.7	97	102.9	364	100.4	279	104.2
第3四半期	1,176	99.7	749	98.8	24	90.5	87	102.6	316	101.6	261	101.5
第4四半期	1,093	98.6	700	98.2	21	85.3	83	101.2	289	100.2	269	99.8
年度計	4,710	99.1	2,962	98.8	94	93.4	356	101.9	1,297	99.6	1,096	102.5
閏年修正後	—	99.4	—	99.1	—	93.6	—	102.2	—	99.8	—	102.8

牛乳等生産量の見通し

28年度は、「牛乳類」は前年のトレンドが継続し年度計で前年比99.1%の見通し。「はっ酵乳」は、引き続き堅調な需要が見込まれ、年度計で同102.5%の見通しである。

乳製品(脱脂粉乳・バター)需給の見通し

28年度の国内生産量は、脱脂粉乳・バターともに前年度をやや下回る(脱脂粉乳132.2千トン・前年比99.2%、バター66.7千トン・同99.3%)見通しである。一方、需要量(表中の出回り量)は、脱脂粉乳は前年度を上回り137.8千トン・同102.1%、バターはほぼ前年並みの74.8千トン・同100.0%の見通しであることから、需要量に対して国内生産量が下回る状況が、今後も続くと見込まれる。

この結果、28年度の輸入売渡し量を加味しない前提においては、28年度末在庫量は、脱脂粉乳は54.6千トン・同90.8%、バターは14.7千トン・同64.2%となる見通しであるが、カレントアクセス輸入(義務輸入)等を勘案すれば、需給の安定は確保されると見込まれる。

※なお、28年度カレントアクセス輸入は、本見通しと同日(平成28年1月27日)に農林水産省より公表された。以下の表中の最下段に「カレントを加味した場合(脱脂粉乳2.0千トン、バター7.0千トン)」を示す。

脱脂粉乳の需給見通し

(千トン,%)

28年度	生産量		輸入 売渡し B	出回り量		期末在庫量			在庫 増減 A+B -C
	A	前年比		C	前年比	月数	前年比		
第1四半期	35.5	107.3	-	34.6	100.7	61.1	5.4	121.1	1.0
第2四半期	27.9	97.4	-	36.4	103.2	52.6	4.7	108.0	▲8.5
第3四半期	30.9	97.6	-	34.3	107.9	49.2	4.4	100.6	▲3.3
第4四半期	37.9	95.2	-	32.5	96.9	54.6	4.9	90.8	5.3
上期	63.4	102.7	-	71.0	102.0	52.6	4.7	108.0	▲7.6
下期	68.8	96.2	-	66.8	102.2	54.6	4.9	90.8	2.0
年度計	132.2	99.2	-	137.8	102.1	54.6	4.9	90.8	▲5.5
カレントを 加味した場合	132.2	99.2	2.0	137.8	102.1	56.6	5.0	94.1	▲3.5

※カレントを加味した場合の数値は、4~6月に2千トン輸入したと仮定した場合(1月27日農林水産省公表)

バターの需給見通し

(千トン,%)

28年度	生産量		輸入 売渡し B	出回り量		期末在庫量			在庫 増減 A+B -C
	A	前年比		C	前年比	月数	前年比		
第1四半期	18.4	107.3	-	16.7	98.8	24.6	3.9	128.3	1.7
第2四半期	14.3	97.5	-	16.5	97.2	22.4	3.6	107.7	▲2.2
第3四半期	14.5	97.7	-	24.5	99.3	12.4	2.0	66.2	▲10.0
第4四半期	19.4	95.2	-	17.2	105.1	14.7	2.3	64.2	2.2
上期	32.8	102.8	-	33.2	98.0	22.4	3.6	107.7	▲0.4
下期	33.9	96.2	-	41.6	101.6	14.7	2.3	64.2	▲7.7
年度計	66.7	99.3	-	74.8	100.0	14.7	2.3	64.2	▲8.2
カレントを 加味した場合	66.7	99.3	7.0	74.8	100.0	21.7	3.5	94.9	▲1.2

※カレントを加味した場合の数値は、4~7月に7千トン輸入したと仮定した場合(1月27日農林水産省公表)

(千トン,%)

	生産量		輸入 売渡し B	供給量		出回り量		年度末在庫量 (民間在庫量)			在庫 増減 A+B -C
	A	前年比		A+B	前年比	C	前年比	月数	前年比		
23年度	134.9	90.7	—	134.9	90.1	146.0	90.8	47.6	3.8	81.1	▲ 11.1
24年度	141.4	104.8	—	141.4	104.8	139.6	95.6	49.5	4.1	103.9	1.8
25年度	128.8	91.1	5.0	133.8	94.6	143.0	102.4	40.3	3.5	81.4	▲ 9.2
26年度	120.9	93.9	22.4	143.3	107.1	137.0	95.8	46.5	3.9	115.6	6.3
27年度	133.2	110.2	15.3	148.5	103.6	134.9	98.5	60.1	5.3	129.2	13.6
28年度	132.2	99.2	—	132.2	89.0	137.8	102.1	54.6	4.9	90.8	▲ 5.5
カレントを 加味した場合	132.2	99.2	2.0	134.2	90.4	137.8	102.1	56.6	5.0	94.1	▲ 3.5

脱脂粉乳需給の 年度推移見通し

※27年度及び28年度は見通し

(千トン,%)

バター需給の 年度推移見通し ※27年度及び28年度は見通し

	生産量		輸入 売渡し B	供給量		出回り量		年度末在庫量 (民間在庫量)			在庫 増減 A+B -C
	A	前年比		A+B	前年比	C	前年比	月数	前年比		
23年度	63.1	89.9	13.6	76.7	106.8	78.2	93.4	19.1	2.8	92.6	▲ 1.5
24年度	70.1	111.2	9.4	79.5	103.7	75.1	96.1	23.5	3.6	123.0	4.4
25年度	64.3	91.7	3.5	67.8	85.3	73.9	98.4	17.3	2.8	73.8	▲ 6.2
26年度	61.7	95.9	12.9	74.6	110.0	74.1	100.2	17.8	2.9	103.0	0.5
27年度	67.1	108.9	12.7	79.9	107.1	74.9	101.1	22.8	3.7	128.0	5.0
28年度	66.7	99.3	—	66.7	83.5	74.8	100.0	14.7	2.3	64.2	▲ 8.2
カレントを 加味した場合	66.7	99.3	7.0	73.7	92.3	74.8	100.0	21.7	3.5	94.9	▲ 1.2

需給動向を踏まえた今後の課題と対応について

安定供給構築に向けた生乳生産基盤の確保

- 28年度の生乳生産量は、北海道では引き続き増加傾向が続くものの、都府県では乳牛頭数が依然減少基調であり、全国では前年度を下回る見通しであることから、28年度以降の動向を注視していく必要がある。
- 酪農乳業は一体となって、計画的な乳牛資源の確保と、今後策定される TPP 対策や、現在の諸施策の効果を見極め、将来にわたって生産意欲が持てるような取り組みを着実に推進することが重要である。

牛乳乳製品需要の維持・拡大

- 牛乳類は、現状のトレンドが継続すると見込まれ、はっ酵乳は、引き続き成長分野として期待される。乳製品需要については、近年の需給状況等に起因する需要喪失を生じないよう万全の対応が必要である。
- 国産生乳の需要を強固なものとするため、牛乳乳製品の価値訴求、価格競争から価値競争への転換、高付加価値商品の開発とともに、国産乳製品の中長期的な競争力を確保できる対策の確立に努めることが必要である。

適切な需給調整のための取り組み

- 28年度の脱脂粉乳・バターは、国内生乳生産の動向を踏まえると、国内生産量が需要量を下回る見通しである。
- 国及び酪農乳業は、生乳生産の維持・拡大とともに、適時適切なカレントアクセス輸入等の需給対応により十分な供給量を確保し、乳製品需給の安定を図るとともに、適時的確な需給情報の提供により、市場からの信頼確保が重要である。

国際化進展に対応した酪農乳業の総合力の強化に向けて

- わが国の乳製品は、TPP 合意の発効や EPA 等の影響により、低関税枠や段階的な関税削減・撤廃の影響から、需給構造が変化する可能性もある。
- わが国の酪農乳業の持続可能性を高めるためには、生乳生産基盤の確保と国産牛乳乳製品の安定的な供給体制の構築、国産酪農製品の競争力と需要基盤の強化、需給変化への弾力的な対応力が、ますます重要な課題となってくる。酪農乳業は一体になって、中長期的な変化動向に対する認識の共有化を図るとともに、わが国酪農乳業の総合力を強化する取り組みを推進することが重要である。

平成28年度牛乳の日・牛乳月間の取り組み

～課題解決に向けた推進方法を決定～

2001年、国連食糧農業機関（FAO）は牛乳への関心を高め、酪農乳業の仕事を多くの方に知ってもらうことを目的に、6月1日を「世界牛乳の日（World Milk Day）」と定め、日本でも2008年から毎年6月1日を「牛乳の日」、6月を「牛乳月間」としている。本事業は酪農乳業への関心を高めることを目的とし、酪農乳業の多面的価値を訴求。特に、学校への牛乳を活用した食育活動や酪農乳業への理解醸成では、連携した取り組みを推進している。28年度の推進方法をここで紹介する。

平成28年度の「牛乳の日・牛乳月間」事業について

課題

これまでの数値目標であった「認知率」が15%程度で増加しない状況を踏まえ、業界内での一体的集中的な活動が推進できる状況を作り出すことが課題。そのためには、事業目的・事業内容の工夫や新たな方策等を含め、29年度から新たに実施するための戦略設計を開始する。

解決に向けた方向性

特に、TPP等の国際化の進展など、新たな酪農乳業をとりまく環境変化の中で、持続可能性の高い日本の酪農乳業産業を構築する視点が必要。そのため、以下の2点のようなことを業界内で酪農乳業者の意識改革を促し、平成28年度の活動をその「機会」にするなど、業界向け活動としての位置づけを強化することが必要。

- 「国内の酪農生産の価値の見直し」
- 「業界内の価格から価値への転換」

平成28年度「牛乳の日・牛乳月間」Jミルク事業概要

ポスター制作や統一的な広報など従来と同様の内容で継続 ※イメージは27年度の活動

「牛乳の日」記念学術フォーラム（開催予定）

開催日時：平成28年6月4日（土）13:00～17:00

開催場所：東京大学・伊藤国際学術研究センター・謝恩ホール

テーマ：ミルクの価値 再発見！～未来へのミルクの物語～

講演1 ミルクをめぐる食生活と人々の価値意識（Jミルク調査から）（仮題）
前田 浩史 氏 / Jミルク専務理事

講演2 日本人の健康とミルクの新しい関係（仮題）
家森 幸男 氏 / 武庫川女子大学 国際健康開発研究所 所長

講演3 ミルクの価値とその伝え方（仮題）
小長谷 有紀 氏 / 人間文化研究機構 理事



業界内向けポスター等の啓発資材の作成

牛乳ヒーロー & ヒロインコンクールにおける酪農乳業者との連携

6月1日は
牛乳の日
WORLD MILK DAY



6月は牛乳月間



牛乳ヒーロー

牛乳ヒロイン

牛乳乳製品に関する食生活動向調査2015から

～牛乳類の飲用頻度は、やや増加傾向へ～

Jミルクは、「牛乳乳製品に関する食生活動向調査2015」の結果を報告した。①牛乳乳製品の価値向上を推進するための基本情報を得ること②マーケティング関連事業の効果検証の基礎とすることを目的に、2012年から継続調査として実施している。本調査はインターネットを活用した消費者パネルに対するもので、年1回、15～70代の男女約1万人を対象にアンケート調査を行っている。ここでは結果の一部を紹介する。

Q 牛乳類飲用(利用)頻度

いま現在、あなたご自身は牛乳類*をどれくらいの割合で飲んだり、利用していますか。

※ここにおける「牛乳類」は、成分無調整牛乳、成分調整牛乳、低脂肪乳、無脂肪乳、加工乳、機能強化乳飲料などの白い牛乳類を指します。コーヒーやフルーツ等が入った乳飲料は含みません。

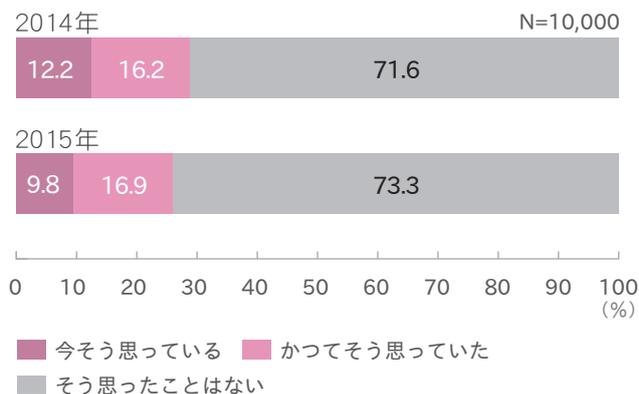
牛乳類の飲用頻度が増える動き

2014年まで少しずつ減少していたが、2015年は「毎日飲む」人が増えて「飲まない」が減少した。飲用増加の理由は、「カルシウム摂取」が男女とも60%前後で最も多く、「栄養(バランス)を意識」「骨の状態を良くしたい」が約30%で続く。また、女性で「カフェオレ」「コーンフレーク」など他のものと混ぜて飲んだり食べたりする人が増えた。



Q 牛乳に対するネガティブな意識

あなたはこれまでに「牛乳を飲みたくない」もしくは「牛乳を飲むべきでない」と思ったことがありますか。

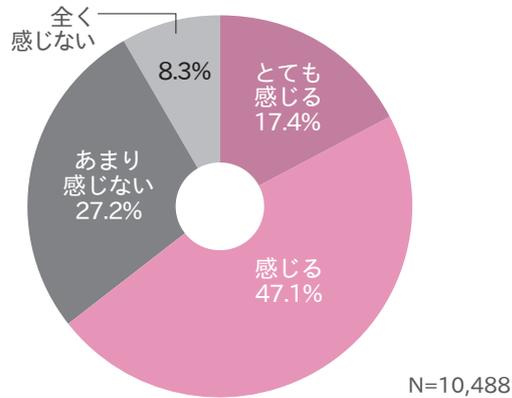


「牛乳を飲みたくない／飲むべきでない」のネガティブな意識は低下

「今、そう思っている」人の割合は2014年よりわずかに低下し、10%を下回った。

Q 酪農家への共感意識

乳牛を飼い、牛乳を生産する「酪農家」に対して、あなたは「誠実さの印象／親しみ／感謝」といった「共感」の気持ちをどれくらい感じますか。

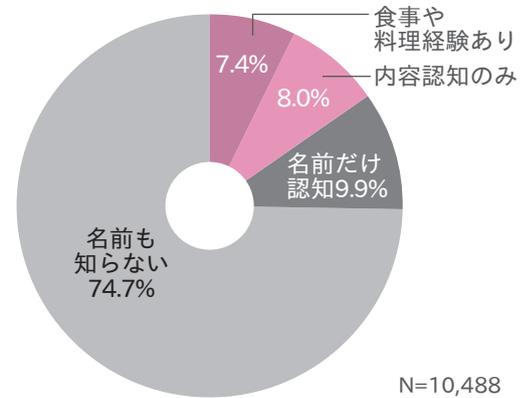


約65%の人が、共感を感じている

共感の理由やきっかけは、「牛乳乳製品を供給してくれる」「生き物を相手にしている」「大変そう」など仕事への関心や理解が多い。また、20代以下では「酪農・牧場体験」を挙げる人も多い。

Q 乳和食への認知、評価

あなたは、牛乳を用いて和食をつくる「乳和食」という料理・調理法について、どれくらいご存知ですか。

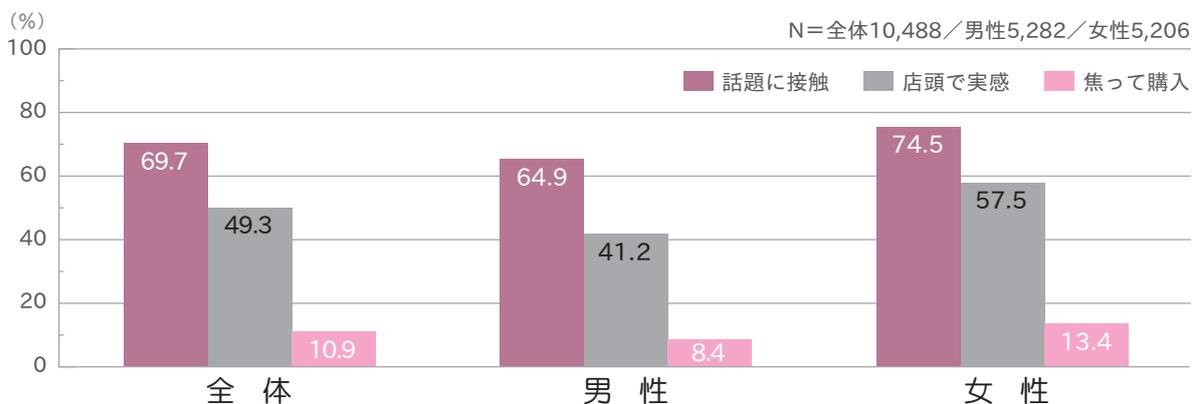


認知率は約25%

「名前だけは知っていた」人を含めて認知率は約25%。牛乳を用いて和食を作る調理法については、約70%が「よいと思う」と評価している。

Q バター不足に対する意識、行動

この1年で、あなたは「バター不足」に関する話題に触れたことはありますか。また、実際に店頭などでバター不足を実感したり、バターを焦って購入したりしましたか。



バター不足を実感した人は約50%、焦って購入した人は約10%

女性のほうが男性より話題に触れたり店頭で実感する割合が高く、焦って購入した割合もやや高かった。バターの購入・利用が増えた人が減った人を約3%下回り、バター風味のマーガリンなど代替品を購入・利用する人が約17%増えた。

Jミルクの活動日誌

平成27年12月1日から平成28年2月29日に実施した主な委員会及びイベント

12 DECEMBER

- 2 第2回ポジティブリスト委員会
- 3 第2回生乳検査精度管理委員会
- 3 牛乳食育研修会4日まで(山口)
- 8 第3回マーケティング委員会
- 12 栄養指導実践セミナー(和歌山)
- 13 牛乳ヒーロー&ヒロイン
コンクール表彰式
- 17 第4回需給委員会
- 18 酪農乳業みらいセミナー(札幌)
- 20 栄養指導実践セミナー(鹿児島)
- 20 乳和食のすすめ研修会(愛媛)

1 JANUARY

- 8 第6回乳の学術連合運営委員会
- 9 栄養指導実践セミナー(岡山)
- 13 第5回需給委員会
- 18 健康科学会議・スポーツ分科会
- 20 第2回生産流通専門部会
- 21 第41回メディアミルクセミナー
- 22 第4回理事会
- 26 健康科学会議・ライフステージ分科会
- 27 酪農乳業危機管理対策連絡会
- 28 乳の社会文化・学術研究
審査委員会
- 29 第4回マーケティング委員会
- 29 健康科学会議リラックス
安眠分科会
- 31 食と教育・学術研究審査委員会

2 FEBRUARY

- 4 第2回マーケティング専門部会
- 4 健康科学会議・免疫分科会
- 18 第5回理事会
- 15 生乳及び牛乳乳製品需給見通し等説明会(東京)
- 24 幼児向け食育教材の効果検証(埼玉)
- 26 生乳及び牛乳乳製品需給見通し等説明会(札幌)
- 29 牛乳乳製品健康科学学術研究
選考委員会
- 29 第4回ライフステージ別栄養指導研究会



笑顔で牛乳を飲む園児



絵本の読み聞かせ

今後のスケジュール 平成 28 年 4 月 1 日から 6 月 30 日までの会議・行事の開催予定を掲載いたします。

日程	イベント	会場	内容
4. 6	第1回マーケティング委員会	Jミルク会議室	平成28年度 マーケティング、広報事業の取り組みについて、「牛乳の日・牛乳月間」の取り組みと次年度に向けた対応
4. 18	健康科学会議幹事会	Jミルク会議室	平成28年度活動計画について
4. 22	第7回乳の学術連合運営委員会	Jミルク会議室	28年度以降の活動計画、29年度の委託研究について
5. 27	第1回理事会	Jミルク会議室	平成27年度定時総会の招集及び付議する事項について
6. 4	「牛乳の日」記念学術フォーラム	東京大学 謝恩ホール	「ミルクの価値再発見！ー未来へのミルクの物語ー」をテーマに講演3題とパネルディスカッション
6. 7	乳和食大量調理セミナー	東京ガス業務用 厨房ショールーム	乳和食大量調理施設向け試食セミナー
6. 17	定期総会、第2回理事会	ベルサール東京 日本橋	平成27年度事業報告・決算等について

平成28年度 ブロック会議を開催

Jミルクでは、右記の日程で平成28年度ブロック会議を開催いたします。詳細は、ホームページにてご確認ください。

※開催時間は各会場とも
14:00～16:30

開催地	開催日	開催都市	開催場所
東京会場	4月7日(木)	東京都中央区	ベルサール東京日本橋
大阪会場	4月12日(火)	大阪府大阪市	大阪リバーサイドホテル
岡山会場	4月13日(水)	岡山県岡山市	アークホテル岡山
福岡会場	4月14日(木)	福岡県福岡市	博多バスターミナル
名古屋会場	4月19日(火)	愛知県名古屋市	名鉄ニューグランドホテル
仙台会場	4月20日(水)	宮城県仙台市	ホテルJALシティ仙台
札幌会場	4月21日(木)	北海道札幌市	アスティ45ACU

スタッフ紹介コーナー

Jミルクで働くスタッフを紹介します。今回は常勤役員・総務グループです。



役員・総務グループ（左から鈴木、丸山、前田、及川、太田）

前田 ■ 専務理事

「一人一人の個性と強みを活かしチーム力を強化して、業界に役立つ組織をめざします。」

丸山 ■ 常務理事、事業統括補佐（生産流通G担当）

「Jミルクの役割は何か、何を期待され、何が出来るのか。緊張感を持って取り組みます。」

及川 ■ 総務部長

「聞きなれない用語や会話に翻弄され続け少し慣れてきましたが、「慣れ」で終わらないよう精進します。」

太田 ■ 経理、税金、社会保険、勤怠、給与

「着任10か月、初めての経理に奮闘中です。L(´・`ロ´・)ﾌﾞﾌﾞﾌﾞ」

鈴木 ■ 総務関連、国際関係

「感謝の気持ちを忘れずに、業界関係者から必要とされるJミルクを目指します。(´_`)♥」



- もうすぐ春分。起床は毎日6時なのですが、ずいぶん明るくなってきてます。ついこのあいだ福岡に出張だったので、6時に起きたら未だ暗い。東京から西に1000km以上、今さらながら経度の違いを実感しました。
- 今回「食生活動向調査2015」の一部を掲載しています。結果が気になるところですよね。2012年の調査開始以来、初めて「毎日飲む」が増えて、「飲まない」が減少、という結果が出ています。良い傾向です。今後の動向を見守っていきたいです。
- 今年もブロック会議の季節がやってきました。上に示されているように、4月7日東京会場を皮切りに、全国7カ所で開催予定です。日頃のJミルクの活動内容を会員の皆様にご存知いただく場・機会です。多くの方々のご参加を期待しています。(K・H)

乳和食コンテンツがさらに充実しました！

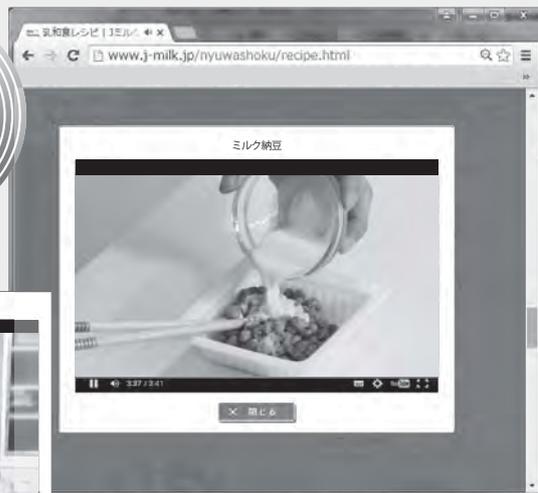
Jミルクでは、乳和食特設Webサイトにて、ミルク納豆やミルク茶碗蒸しなどさらに乳和食の魅力が詰まったレシピと調理動画をあわせて公開しました。また、乳和食の特徴とレシピをお伝えいただくリーフレット8種類も追加。さらにコンテンツが充実しました。スマートフォンにも4月から対応となりましたので、ぜひ新しいWebサイトをご利用ください！



New-Washoku
乳和食
ミルクの和食革命！



茶わん蒸し



ミルク納豆



j-milkレポート vol.20 発行日/2016年3月

編集・発行/ **j-milk** 一般社団法人 Jミルク

住所:〒104-0045 東京都中央区築地4丁目7番1号 築地三井ビル5階 TEL.03-6226-6351 FAX.03-6226-6354

ホームページアドレス <http://www.j-milk.jp/> <https://www.facebook.com/jmilk.jp>